『五音三曲集』「廿六声曲」注釈（二）

樹下文隆

前号に引き続き、世阿弥五音説に依拠した点が特に顕著な、金春禅竹『五音三曲集』前半部の「五音三曲廿六声曲」に見る禅竹の言葉に着目し、世阿弥用語との比較検討を行い、併せて、当該箇所の注釈も試みる。今回は幽玄と恋慕、哀傷を取り上げる。使用テキストは、禅竹自筆本を底本として、金春八左衛門本を参照しつつ私に作成した本文に基づく。注釈の趣旨、方法については前号を参照されたい。

三、幽玄

五音三曲第二、幽玄、心・詞[1]幽玄曲味。

この曲味、[2]花紅葉の[3]色めかしき[4]風色にはあらず（「に限らず」か）。心細く、かすかに、[5]興に乗じて来たり、興尽きて帰る。[6]幽情の[7]曲感なるべし。古歌に云はく、

[8]有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし

皮味

[9]［さし声］さなきだに物の寂しき秋の夜に　人目稀なる古寺の庭の松風ふけ過ぎて　月も傾く軒端の草　忘れて過ぎしいにしへを　しのぶ顔にていつまでか　待つことなくて長らへん　げに何事も思ひ出の　人には残る世の中かな

［下歌ふ］ただいつとなく一筋に　頼む仏の御手の糸　導き給へ法の声

［上］迷ひをも　照らさせ給ふおん誓ひ　照らさせ給ふ御誓ひ

げにもと見えて有明の　行方は西の山なれど　眺めは四方の秋の空　松の声のみ聞こゆれども　嵐はいづくとも　定めなき世の夢心　何の音にか覚めてまし　何の音にか覚めてまし

[10]ある和歌の秘書に、「心・詞、かすかに、ただならず」と言へり。

1. 「幽玄体」は、『三五記』の和歌分類では第一に配され、行雲体・廻雪体を伴う。なお、「花紅葉の色めかしき風色にはあらず（又は「に限らず」）」で想起される定家の和歌「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」（『新古今和歌集』）は、『三五記』に載らず、禅竹伝書にも引用がないものの、室町後期の謡伝書によく引用される。江戸初期の堂上歌人、烏丸光広の歌学書『耳底記』（寛文元年刊）に、以下の記事があるのもそれを裏付けている。

この歌は、「鳴立つ沢」の歌をうらやみて詠みたる歌なり。何の手もなく見たる良きなり。この歌乱舞（能楽のこと）の事に多く引けり。何の道も道は一なり。何の手もなく、しかも面白き景気を含めり。『この次』（能の伝書名か。不明）に云はく、「一噌笛いなかものなり」（一噌は中村又三郎。慶長五年没）となり。鳴立つ沢の歌、鳴の立つにあはれの知らるゝは自然の道理なり。面白がらするは田舎芸なり。

2. 「花紅葉」は、世阿弥に用例がない。しかし、『五音曲条々』で

一、紅葉　〈恋慕姿〉下紅葉カツ散ル山ノ夕時雨ヌレテヤ鹿ノヒトリ鳴クラン

紅葉ハ、秋暮ノ情ヲ見セテ、色ニ染ミ、露置キ並ブヨソヲイ、恋慕怨声ノ思イニ通ズ。

とあり、「紅葉」を恋慕の喩えとして用いている。

3. 「色めかし」は、世阿弥に用例がない（ただし、「色めく」はある）。『時代別国語大辞典　室町時代編』に「2. はなやかで、派手なさま」として、この用例を挙げるが、「1. 恋愛や情事の方面に強く関心がある様子である。色好みらしい」として、『身のかたみ』（一条兼良作か?）の以下の用例を挙げる（引用は群書類従巻四百七十八より）。

四十三。花紅葉を人に遣はす事。親しき御なからひなどにかき交はされん御仲は苦しからず候。それとも男繁きあたりは、色々しき節もやと御心置かせおはしますべし。大原野の花、黒谷の梅、嵐山の紅葉などは、参らせても苦しからず候。さるは御庭の梢など事過ぎたる物。舟などにうち置かれ候は苦しからず候。良き悪しきも優しき様にて、色めかしく候。さりながら女どちはいかほども苦しからず候。

思うに、禅竹はこのような文の影響で、「花紅葉」を「色めかしき」ものと認識したか。『五音之次第』では、「恋慕」の項において、『五音曲条々』を承けて「幽曲に哀をそへたり、喩紅葉の如し」と記している。また、『永正十八年元安伝書』に「哀傷」の曲について、「たとへば、枯はてたる木のしかも春秋の面影の残るがごとし。花紅葉の妙にたのしひも、今は露はなる枝のみにて、更に飾れる方なし。されども、其面影はたしか也。此曲と以前の恋慕の声懸の替はり目、一大事なるべし。」とするのも、花と紅葉を恋慕に喩える禅竹の影響かも知れない。これらを考え合わすと、禅竹の幽玄体は「花紅葉の色めかしき風色」を含むものと解すべきであろう。

4. 「風色」は、『二曲三体人形図』に「梅花を以て式年の初花とす。しかれば、二曲は児姿遊風の初花となる故に、梅花を幽曲の風見とす。二曲より、三体、足踏生曲に至るまで、連華風色を露はすなり。よくよく見得すべし」とあり、傍線部を思想大系頭注は「連続して梅花を書き添え、各風体の幽玄美の度合いを示しておく、の意」と説く。

5. 「興に乗じて来たり、興尽きて帰る」は、中国の故事による画題。晉の猷は雪の夜に興を覚えて、友人の戴逵（たいき）を浙江の

刻に訪れたが、門前で興が尽き、会わずに帰った。『日本国語大辞典』（小学館）には、晋書・王微之伝「本乗興而来、興尽而反」を用例として挙げる。

6．「幽情」は、世阿弥に用例がない。禅竹は『歌舞髄脳記』序文で「此境界に心を染め、歌舞幽情の曲味を作し」と記す。『歌経標式』に「原夫歌者、所以感鬼神之幽情、慰天人之恋心者也。所以異於風俗之言語、長於遊楽之精神者也（そもそも歌は、鬼神の幽情を感じ、天人の恋心を慰むる所以、風俗の言語を異にし、遊楽の精神に長ずる所以なり）」とあり、禅竹は歌学書からこの表現を得たか。

7．「曲感」は、『三道』に、「また作り能とて、さらに本説もなき事を新作にして、名所・旧跡の縁に作りなして、一座見風の曲感をなす事あり」とあり、『拾玉得花』に、「陰陽和合するとは、自然、座敷の天気陰気なんどにて、物寂たる気色ならば、陰気ぞと心得て、陽声・永曲を相音に休息して、音感をなす所、これ一座成就の感応なり。その感応より見風に匂ふ体風、「すわ、面白し」と見る数人感応なり。かくの如く、曲感に和する成就をや、出で来たる時分と申すべき」とあり。ともに、聴覚で魅了された観客に相応の見風を演者が見せることを言うか。禅竹の場合も、聴覚だけでなく「花紅葉」のごとき見風が意識されていると考えられる。

8．『古今和歌集』巻第十三恋歌三、壬生忠岑の歌（六二五番歌）。『三五記』。

9．〈井筒〉第二段［サシ］［下ゲ歌］［上ゲ歌］。内容は新潮日本古典集成『謡曲集　上』を参照のこと。

10．『三五記』に、「物じて歌の心詞かすかにただならぬ様なり」とある。

幽玄第二、[1]行雲・[2]廻雪曲味。

[3]花やかに、しかも、[4]冷え上りたる余情、[5]詠曲のかかり、よしあるべし。古歌に云はく、

行雲体［歌］[6]下燃えに思ひ消えなん煙だに跡なき雲の果てぞ悲しき

廻雪体　[7]風吹けばよそに鳴海の片思ひ思はぬ浪に鳴く千鳥かな

骨味

[8]［さし声］心尽くしの秋風に　海は少し遠けれども　かの行平の中納言　関吹き越ゆると詠め給ふ　浦曲の浪のよるよるは　げに音近き海士の家　里離れなる通ひ路の　月よりほかは友もなし

［さし］げにや憂き身の業ながら　ことにつたなき海士小舟の渡りかねたる夢の世に　住むとや言はん泡沫の　潮汲み車寄るべなき　身は海士人の袖ともに　思ひを干さぬ心かな

（下ゲ歌）かくばかり　経がたく見ゆる世の中に　うらやましくも澄む月の　出潮をいざや汲まうよ　出潮をいざや汲まうよ

［上］影恥づかしき我が姿　影恥づかしき我が姿　忍び車を引く潮の　跡に残れる溜まり水　いつまで住みは果つべき　野中の草

の露ならば　日影に消えも失すべきに　これは磯辺に寄り藻掻く海士の捨て草いたづらに　朽ち増さりゆく袂かな　朽ちまさりゆく袂かな

肉味

[9]［節曲舞　さし声］されば心を種として　花も栄ゆく言葉の林紀の貫之も書きたるなり

［下］在原の業平は　その心余りて　言葉は足らず　例へば　萎める花の色なくて　匂ひ残るに異ならず　宇治山の喜撰が歌は　その言葉かすかにて　秋の月の雲に入る　小野の小町は　妙なる花の色好み　歌のさまさへ嫗にて　ただ弱々と詠むとかや

［上］大伴の黒主は　薪を負へる山人の　花の陰に休みて　いたづらに日をや送るらん　これらは和歌の詞にて　心の花を現す千種を植うる吉野山　落花は道を埋めども　去年の栞ぞしるべなる

[10]ある和歌の秘書に、「行雲・廻雪は、幽玄のうちの余情なほ優れて、薄雲の月を帯びたる装ひ、飛雪の風に漂ふ心地して、心詞のほかに影の浮かび添へらん」と言へり。

1. 「行雲体」は、『三五記』十体のうち第一「幽玄体」に付された細分の名称（行雲体・廻雪体）。
2. 「廻雪体」は、『三五記』十体のうち第一「幽玄体」に付された細分の名称（行雲体・廻雪体）。
3. 「花やかに」は『花伝』に六例あり。いずれも美しく幽玄な声や姿を示す語である。禅竹は、『六輪一露秘注（寛正本）』で、「空輪」の説明に「五十余より以後の真曲なり。音感は花やかに若やぎて、曲重せざる所なり。」とする。若々しく明るく美しい音声を意味するようだ。
4. 「冷え上る」は世阿弥に用例なし。「冷ゆ」の例は三例ある。
   寂び寂びとしたる中に、なにとやらん感心のある所あり。これを、冷えたる曲とも申すなり。（『花鏡』）
   宝剣光すさまじきは、冷へたる曲風なり。（『九位』）
   尺八一手吹き鳴らひて、かくかくと謡ひ、様もなくさと入、冷えに冷えたり（『申楽談儀』。増阿弥の批評）
   いずれも、最上級の曲感を指すと思われる。禅竹はこれを「冷え上る」と言い換えたと思しく、
   第二、口業。音感幽玄に美しく、冷え上り澄む位、竪輪の清曲なり。（『至道要抄』）
   など、用例が多い。
5. 「詠曲」は世阿弥に用例なし。但し、『拾玉得花』に陽声と対で永曲の語あり。『時代別国語大辞典』では、永曲に世阿弥の例を挙げ、別に詠曲を立項して禅竹の『歌舞髄脳記』を挙げ、『日葡辞書』より「歌の曲。音律の抑揚調節、または、歌のよい音調」とする。世阿弥の例を永曲とするのは、「永夜」の文字に引かれたためと思われるが、「長める節」（思想大系頭注）の意味とは考えにくい。どの字を用いても同じく音調を意味すると思われ、禅竹は『拾玉得花』によりこの語を得たと考えられ、多用

している。

陰陽和合するとは、自然、座敷の、天気陰気なんどにて、物寂びたる気色ならば、陰気ぞと心得て、陽声〈尚〉・永曲〈*江月照松風吹、永夜清宵所何作〉を相音に休息して、音感をなす所、これ、一座成就の感応なり。（『拾玉得花』）

※「江月照らし松風吹く、永夜の清宵何のなすところぞや」は禅語。「江上の月は　輝き、松の枝をわたる風は清い。悟境の妙なる風光をいう」（『禅学大辞典』）

これすなはち、神楽のはじめ、歌舞詠曲の根源たり。（『歌舞髄脳記』）

しからば、詠曲して舞うたふこと、無上幽情の感、などかなからん。（同右）

6．『新古今和歌集』巻第十二・恋歌二（一〇八一番歌）「五十首歌奉りしに、寄雲恋」藤原俊成女。三五記行雲体。

7．『新古今和歌集』巻第六・冬歌（六四九番歌）「最勝四天王院の障子に、なるみの浦書きたる所」藤原秀能。廻雪体。

8．〈松風〉第4段［サシ］［下ゲ歌］［上ゲ歌］（内容は新潮日本古典集成『謡曲集　下』参照。）

9．〈実方〉第4段［サシ］［クセ］（内容は有朋堂文庫『謡曲三百五十番集』など参照。）

10．『三五記』に「幽玄は総称、行雲廻雪は別名なるべし。所詮幽玄といはるる歌の中に、なほ勝れて、薄雲の月をおほひたるよそほひ、飛雪の風に漂ふけしきの心地して、心詞の外にかげのうかびそへらむ歌を、行雲、廻雪の体と申すべきとぞ亡父卿申されし。」とあり。

幽玄第三、見様曲味。［1見様体］

花に面白きかかり、耳目を驚かす[2]曲声、[3]景中に心あり。古歌に云はく、

[4]下紅葉かつ散る山の夕時雨濡れてや鹿の独り鳴くらん

［羽宮］皮味

[5]［上］春宵一刻　値千金　花に清香　月に影　げに千金にも替へじとは　今この時かや

［呂］（歌）やらやら面白の　地主の花よ候ふやな　桜の雲間に洩る月の　雪も散る夜嵐の　誘ふ花と連れて　散るや心なるらん

［下］さぞな名にし負ふ　花の都の春の空　げに時めける装ひ青陽の影緑にて　風のどかなる　音羽の滝の白糸の　繰り返し返しても　面白やありがたやな　地主権現の　花の色も殊なり

［上］ただ頼め　標茅が原のさしも草　われ世の中に　あらん限りはの御誓願　濁らじものを清水の　緑もさすや青柳の　げにも枯れたる木なりとも　花桜木の装ひ　いづくの春もおしなべてのどけき影は有明の　天も花に酔ゑりや　面白の春べや　あら面白の春べや

[6]［小歌曲節舞］そもそも天の潤ひに　雨露霜雪の四つを立て同じく雪月花の　三つの徳を誉むるにも　雪こそことに優れたれ

まづ春は梅桜　咲くより散るまでも　雪を忘るる色もなし　夏は五月雨の　古屋の軒端暮れながら　庭は曇らぬ卯の花の　垣根は雪に洗はれ

[上] 夜寒忘れて待つ月の　山の端白き影までも　降らぬ雪かと疑はれ　冬野に残る菊までも　すは初雪と面白さに　山路の憂きや忘るらん

[7]ある和歌の秘書に「この体は、つたなからん口がらにて、つやつや詠まるまじき姿なるべし。これも堪器の所には、やすらかなるべき様なり。景気歌とて、そぞめきかけて詠むなり」と言へり。

1. 『三五記』第八、見様体。

2. 「曲声」は、世阿弥に四例あり。

ここにまた、開聞・開眼とて、能一番の内、破・急の間にこれあり。開聞は、二聞一感をなす際なり。その能一番の本説の理を書きあらはして、数人の心耳を開く一聞に、またその理をあらはす文言、曲声にかなひて、理・曲一音の聞感をなして、即座に一同の褒美を得る感所なり。(『三道』)

音曲も、直ぐなるかかりの、七五七五の拍子のままにて曲声正路なるは、音聞幽々と行くなり。(『曲付次第』)

まづ、しばらく、初心習道のためにおいては、一調・二機・三声の入門より、曲声の次第を分別すべき事。音声に、横・主の二つあり。呂律に取らば、横は呂、主は律なるべきやらん。調子を含んで音取る機は主なり。さて、声を出してすでに歌ふ所は横たり。(『風曲集』)

松木　万代を松にぞ君を祝いつる千年の蔭に住まんと思えば

聖徳太子の御金言、「正法尽きて禅に移り、数木枯れて松にならん」と云々。松はもとより霊木として、古今の色なく、千秋の風姿、自づから満目青山の装いをなせり。祝言の曲声、安全の感音をなす所、相当これあり。(『五音曲条々』)

3. 「景中」は世阿弥に用例なし。ただし、世阿弥には「意中」(『二曲三体人形図』『風曲集』『却来華』『申楽談儀』)「意中の景」(『至花道』『遊楽習道風見』)「意景」の用例があり、もとは漢籍に登場する「意中有景、景中有意」に由来することが、『五位』の記事からわかる。

三、意風

意者、所成内意風、顕外、至妙成感。顕浅深、成諸体之風根。是、見面白花種也。

玉屑評詩曰、意中有景、景中有意、云。

意といつぱ、内に成す所の意風、外に顕はれ、至妙の感を成す。浅深を顕はし、諸体の風根と成る。これ、面白き花を見する種なり。

玉屑の評詩に曰く、「意中に景あり、景中に意あり」と云へり。(『五位』)

※玉屑は、中国宋代に成立した漢詩の評論書『詩人玉屑』

のこと。本来は、抒情に　叙景を含み、叙景に抒情を含む余情に富んだ表現を意味する（岩波思想大系頭注）

ここは『拾玉得花』の

さてこそ、九位第一にも、妙花をもて金性花とは定位し侍れ。舞歌の曲をなし、意景感風の心耳を驚かす堺、覚えず見所の感応をなす。これ、妙花なり。これ、面白きなり。これ、無心感なり。

を踏まえていると思われ、「耳目を驚かす」という表現も『拾玉得花』の「心耳を驚かす」の言い換えだろう。

4．『新古今和歌集』巻第五・秋歌下（四三七番）。詞書「和歌所にて、男ども歌よみ侍りしに、夕べの鹿といふことを」藤原家隆。三五記見様体。

5．〈田村〉第4段［詠］［歌］第5段［クセ］。内容の詳細は、新潮日本古典集成『謡曲集　中』参照。

6．〈四季〉（番外曲〈雪翁〉の［クセ］。但し、〈四季〉［クセ］は、禅竹時代にすでに成立しているが、〈雪翁〉はその後の成立と思われる。内容の詳細は、『謡曲大観　別巻』参照。

7．『三五記』に、「この体は、つたなからむ口がらにて、つやややよまるまじき姿なるべし。これも堪器のところには、またいとやすらかなるべき様なり。達者もこの体をば、朦気のさして、心底明らかならぬ時は、景気歌とてそぞめきかけて読むなり」とあり。

幽玄第四、[1]遠白体曲味。

[2]声懸・曲味、いづれも[3]幽に長けありて、ほのかなる[4]体曲なり。

古歌に云はく、

[5]天の戸を押し開け方の雲間より神代の月の影ぞ残れる

肉味

[6]［さし声］君が住む　越の白山知らねども　行きてや見ましあしびきの　大和はいづく白雲の　高間の峰のよそにのみ　見てや止みなん及びなき　雲居はいづく御影山　日の本なれや曇りなき　玉穂の都へ急ぐなり

［下］ここは近江の湖なれや　みづから由なくも　及ばぬ恋にうき舟の

［上］こがれ行く　旅をしのぶの摺り衣　旅を忍ぶの摺り衣　涙も色か黒髪の　あかざりし別れ路の　跡に心のうかれ来て　鹿の起き臥し堪へ兼ねて　なほ通ひ行く秋草の　野くれ山くれ露分けて　玉穂の宮に着きにけり　玉穂の宮に着きにけり

[7]ある和歌の秘書に、「器量の稽古、年古りたらんところに、詠まるべき姿」と云へり。

1．『三五記』第二長高体には、「高山体・遠白体・澄海体」が付属し、「ただ長高体のうちに、かやうの姿あひ変はるべし。」と説明されている。

2．「声懸」は、世阿弥に六例あり。「声がかり」を音読みしたもので、片仮名書きの漢文訓読体風の伝書に見られる。

是ハ、タヾ詮ズル所、声懸ニアルベキ也。抑モ、声ガカリノ事、曲所ニ付キテ大事アリ。曲ノ奥義トモ申スベシ。（中略）此位ヲスデニ忘レテ、覚エズ知ラズ感聞ニアラワル、所、是マコトノ声懸也。（『五音曲条々』）

サテ、無曲ノ在所ヲバ、ナニトカ云フベキ。モシ声懸ノミカ。マタ云ハク、声ヲツカイ、声ニツカワル、在所アルベシ。声ヲツカウハ節也。声ニツカワル、ハ懸ナリ。（『五音曲条々』）

ここでは、「声懸」を「声ガカリ」と言い換えているので、両者が同じ意味であることは明らかである。なお、「声がかり」は世阿弥に十五例ある。禅竹は「声がかり（声懸）」の例が三例ある。なかでも、『五音十体』で「このばうおくと恋慕との、こはがかりのかはりめ、大事なるべし。」は、『五音』上の「しかりといへども、音曲を万人もてあそぶばかりにて、曲舞・只謡の音声の性位の分け目をも知る人なく、まして、祝言・亡臆の声懸の変はり目も分明ならねば」を踏まえていると思われる。

3. 「幽に」は世阿弥に用例なし。世阿弥は幽玄の幽を単独で使用することはほとんどないが、禅竹は頻繁に使用している。たとえば、『歌舞髄脳記』で〈砧〉の曲を「この姿、恋慕に乱るる心。よしかかり、幽にほのかなり」と評価しているが、このように、幽（幽玄）と「ほのか」が合体した使用例が多く見られる。世阿弥は『花伝』で「さらに幽玄にはなきシテの、長けのあるもあり。」などと「長け」を幽玄とは別に論じているが、禅竹の「長け」の例はこの一例のみ。

4. 「体曲」は、世阿弥に以下の例がある。

遊楽の成功長じて、用また体に成る見風あるべし。上果曲体の見風に至りぬれば、体・用、分け目あるべからず。しかれば、諸体の用風、すなはち体曲と成る成功の曲、これ妙体か。（『至花道』）

『至花道』はもっとも早期に禅竹が伝授された伝書と考えられ、禅竹に与えた影響は大きい。

5. 『新古今和歌集』巻第十六雑歌上（一五四七番歌）。詞書「春日社歌合に、暁月の心を」摂政太政大臣（藤原良経）。『三五記』長高体の例歌。

6. 〈花筐〉第5段［サシ］［下ゲ歌］［上ゲ歌］。内容の詳細は新潮日本古典集成『謡曲集　下』参照。

7. 『三五記』に「遠白体、器量天性ならむが、稽古年古りたらむ所に、終によまるべき姿なり」とあり。

幽玄第五、有心体曲味。

[1]心深く、[2]まことしく、しかも匂ひあるやうに謡ふべき曲声なり。古歌に云はく、

[3]津の国の難波の春は夢なれや芦の枯れ葉に風渡るなり

肉味

[4]［さし声］あるは男山の昔を思ひ出でて　女郎花の一時をくねると言へども　言ひ慰むる言の葉の　露もたわわに秋萩の　元の契りの消え返り　つれなかりける命かな　さればかほどに衰へて

身を羽束師の森なれども　言葉の花こそ便りなれ

［下］難波津に　咲くや木の花冬籠もり　今は春べと咲くや　木の花と栄へ給ひける　仁徳天皇と　聞こえさせ給ひしは　難波の御子の御事　また安積山の言の葉は　采女の盃取りあへず　恨みを述べし故とかや　この二歌は今までも　歌の父母なる故に代々に遍き花色の　言の葉草の種取りて　我等ごときの　手習ふ始めなるべし　しかれば目に見えぬ　鬼神をも和らげ　武士の心慰むる　夫婦の情け知る事も　今身の上に知られたり

［上］津の国の　難波の春は夢なれや　芦の枯れ葉に風渡る　波の立ち居の隙とても　浅かるべしや海洋の　浜の真砂は　読み尽くし尽くすとも　この道は尽きせめや　ただもてあそべ名にし負ふ　難波の恨みうち忘れて　ありし契りに帰り逢ふ　縁こそうれしかりけれ

[5]ある和歌の秘書に、「有心体をもて至極とすべしと言へり。まことしからぬ事を、ただ、とざまかうざまに、心深きやうに詠みたりとも、それをば有心体に摂して、理世等の歌とは申すべからず。有心体にも、あまたの品あるべし。理世・撫民等も、これより出でたる風味なり。ただ心を深く詠むべし」と言へり。

1. 「心深し」は、禅竹語と言うべきか。
ただ心深く、姿幽玄にして、詞いやしからざらんを上果の位とす。（『歌舞髄脳記』）
和歌の三体にも、ただ恋は艶よと書かれたれば、艶に心深かるべきやらん。（『五音三曲集』）
色心にとれば、色体は幽玄之体、心は恋慕の方なるべし。姿美しくして、心深き、これ肝要なり。心深きは声音のかた、遍智の思ひ籠もりて、姿かかり、長け高く、美しき、この道の至極無上の至り也。（『至道要抄』）

2. 「まことしく」は、『三五記』にもある語彙。「匂ひある」は、「匂ひ影あり」として禅竹伝書に頻出する。『至花道』「能に体・用の事を知るべし」条（第五条）に、「体は花、用は匂のごとし」、『五音曲条々』（桜木）に、「然バ、曲音ノ匂、詠歌ノ曲吟、サナガラ花鳥ノ色音ヲ以テ、調感ヲナスベシ」などとあることから、花の面影（恋慕）の「匂ひ」ということだろうか。

3. 『新古今和歌集』巻第六冬歌（六二五番）。西行法師。『三五記』有心体例歌。

4. 〈芦刈〉第九段［サシ］［クセ］。内容の詳細は岩波日本古典文学大系『謡曲集　上』参照。

5. 『三五記』に有心体を以下のように述べている。
この体ぞ、まことに歌の本懐にて侍るべき。ただ最初より、心を深く詠まむとすべき事とぞ、先哲も申したんめる。それはまた、さながら心を得べき習ひ侍るべし。心の詠まれざらむを、詠まむ詠まむと心を凌げば、退屈してほれ歌とて、何にもよらぬ歌のみ詠まるるなり。進退は宜しくぞ見せよと亡父卿示し給ひき。およそ有心体をもて至極とすべしといへり。理世・撫民の至極体は、大旨は有心体の中の本姿なり。同じ

有心体と申しながらまことしくありのままに、げにさることと覚ゆるやうに、心を深く詠み据ゑたらむ類を、理世・撫民等の体とすべし。まことしからぬ事をとざまかうざまに心深き様に詠みたりとも、それをば有心体に接して、理世等の歌とは申すべからず。有心体にもあまたの品侍るべし。たとへば、異域の堯舜、当朝の延喜・天暦などを無比の賢王と申すがごとく、歌の体にも、かの理世・撫民の体をもて無上の至極とすべし。かたはしづつ申したらば、これにてよくよくわきまへさとるべきにや。

四、恋慕

五音三曲第三、恋慕、[1]濃体曲味。

[2]遠見の遠き姿を、近々と見るやうに、[3]細やかに、しかも心深く、[4]艶なる体曲なり。[5]幽玄の方は疎き方あるに似たり。古歌に云はく、

[6]立ち出でて妻木を刈りし［「拾ふ」ともあるか］片岡の深き山路となりにけるかな

骨味

[7]［序］月重山に隠れぬれば　扇を挙げてこれを喩へ　花琴上に散りぬれば　雪を集めて春を惜しむ

［さし声］夕べの嵐朝の雲　いづれか思ひの妻ならぬ　寂しき秋の風の音　鶏籠の山に響きつつ　明けなんとして別れを催し　せめて閨洩る月だにも　しばし枕に残らずして　また一人寝になりぬるぞや

［曲節舞］翠帳紅閨に　枕並ぶる床の上　馴れし衾の夜すがらも　洞穴の跡夢もなし　よしそれも同じ世の　命のみをさりともと　いつまで草の露の間も　比翼連理の語らひ　その驪山宮のささめごとも　誰か聞き伝へて　今の世まで洩らすらん　さるにても我が夫の　秋より先に必ずと　夕べの数は重なれど　徒し言葉の人心　頼めて来ぬ夜は積もれども　欄干に立ち尽くして　そなたの空よと眺むれば　夕暮れの秋風　嵐山おろし野分も　あの松をこそは訪るれ　我が待つ人よりの　音信をいつ聞かまし

［上］せめてもの　形見の扇手に触れて　風の便りと思へども　夏もはや　杉の窓の秋風　冷ややかに吹き落ちて　団雪の扇も雪なれば　名を聞くもすさまじくて　秋風恨みあり　よしや思へば　これとても　逢ふは別れなるべき　その報ひなれば今さら　世をも人をも恨むまじ　ただ思はれぬ身の程を　思ひ続けて一人居の　班女が閨ぞ寂しき

[8]ある和歌の秘書に、「この体をば、相構へて初心の時より詠み習ひて、言葉遣ひを鮮やかに、口軽なるやうに学ぶべし。しかも、理り、確かに聞かする様なるべし」と言へり。

1. 『濃体』は、『三五記』第七の歌体。
2. 「遠見」は世阿弥伝書に頻出。日本思想大系『世阿弥　禅竹』補注に、

世阿弥に十五例見え、至花道期以後に世阿弥が愛用した語の一つである。『大系』（岩波日本古典文学大系『歌論集　能楽論集』）補注は、①遠くから望み見る光景、②遠くを見渡したりして見物に広い遠景を想像せしめるような風体、③見風とほとんど同意のもの、④何かが根底・背景になっていて、それが間接的に遠くから力を及ぼして生じる効果的見風、の四種の意に大別している。①と②が「遠くを見る」につながる用法であり、③と④はそれを離れ、《間接的効果》の意でまとめ得る用法である。

として、世阿弥の用例を①～④に分類している。それに従えば、ここでの例は①に相当すると考えられる。

3. 禅竹の濃体を考える時、「こまやかなる」の語が重要な意味を持つと思われる。『歌舞髄脳記』で、〈求塚〉について、「この姿、こまやかなる体なり。ふか立ちぬれば、俗になる所を知るべし。ただ幽玄のこまやかなり」とし、

　眺め侘びぬ秋よりほかの宿もがな野にも山にも月やすむらん（三五記・濃体）

を挙げる。また、『五音十体』では、第八濃体の「濃」に「コマヤカ」と注記しており、禅竹は「濃体」を「こまやかなる体」と表現していることがわかる。

4. 「艶」は世阿弥に用例なし。禅竹は『五音十体』で、第三恋慕曲の説明として、以下のように記す。

　恋慕は、幽玄をなほ深むる曲味、性に、艶に切なる所を本とす。この体に、あはれも余情もあり、影も匂ひも添ふなり。

5. 類似の表現として、『歌舞髄脳記』（精撰本）「第三女体」で「箱崎松」に以下の記述がある。

　是は神女のかゝり。幽玄之方は心おくれしたるやう也。物ほそく見ざめせぬ姿、竹の体か。

これは、神女であるから、幽玄より神さびて直ぐなる体にすべきということであろう。また、『至道要抄』では、

　恋慕者、思内にあれば、色外にあらはるゝ体也。此段、心を以て本とす。色心にとれば、色体は幽玄之体、心は恋慕の方なるべし。

との記述があるので、恋慕の心を深く艶に表出することで、幽玄の遠見から外れるということであろう。

6. 『新古今和歌集』巻第十七雑歌中（一六三四番）。詞書「山家送年といへる心をよみ侍りける」　寂蓮法師。二句目は「つまぎをりこし」。なお、『玄玉和歌集』所収歌では「つま木をこりし〈刈りし〉」、『定家十体』所収歌では「つまぎををりし〈折りし〉」。

7. 〈班女〉第7段［クリ］［サシ］［クセ］。内容の詳細は、新潮日本古典集成『謡曲集　下』参照。

8. 『三五記』「濃体」の説明に、「この体をば、相構へて初心の時より読みならひて、ことばづかひをあざやかに、口がろなるやうに学ぶべし。愛あるが、しかもことわりたしかにきかする様なるべしとやらむ」とあり。

恋慕第二、[1]麗体曲味。

恋に思ひ侘びて、[2]狂ぜる姿、[3]麗しき曲体なるべし。古歌に云はく、

[4]ほのぼのと明石（の）浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ

[肉味]

[5]［歌ふ］恋草の　露も思ひも乱れつつ　心狂気に馴れ衣の　巳の日の祓へ（「ひ」とも）や木綿四手の　神の助けも波の上　哀れに消えし憂き身かな

（クセ）哀れいにしへを　思ひ出づれば懐かしや　行平の中納言　三年はここに須磨の浦　都へ上り給ひしに　このほどの形見として　御立烏帽子狩衣を　残し置き給ひしに　これを見るたびにいや増しの思ひ草　葉末に結ぶ露の間も　忘ればこそ味気なや　形見こそ　今は徒なれこれなくは　忘るる暇もありなんと　詠みしも理や　なほ思ひこそは深けれ

［上］宵々に　脱ぎて我が寝る狩衣　かけてぞ頼む同じ世に　住む甲斐あらばこそ　忘れ形見もよしなしと　捨てても置かれず取れば面影に立ち増さり　起き臥し分かで枕より　後より恋の責め来れば　せん方涙に　伏し沈むことぞ悲しき

[6]和歌の三体にも、「ただ恋は艶に」と書かれたれば、艶に心深かるべきやらん。

1．「麗体」は、『三五記』第四に分類。存直体、花麗体、松体、竹体を含む。

2．世阿弥に、「狂ず」の用例はないが、物狂について以下のように述べている。

親に別れ、子を尋ね、夫に捨てられ、妻に後るる、かやうの思ひに狂乱する物狂、一大事なり。（中略）思ひ故の物狂をば、いかにも物思ふ気色を本意に当てて、狂ふ所を花に当てて、心を入れて狂へば、感も、面白き見所も、定めてあるべし。かやうなる手柄にて人を泣かする所あらば、無上の上手と知るべし。（『花伝』物まね）

逆に禅竹には、「狂ふ」や「物狂」に関する記述はない。『五音之次第』で、恋慕について「幽曲に哀れを添へたり。たとへば、紅葉のごとし」、哀傷について「これは無常音なり。恋慕に、ばうおくのかかりを添へたり。たとへば、枯れ木のごとし」と記し、『五音十体』で哀傷の説明に

春の花も、秋の紅葉も、みな散り散りになりはてたる野山の、風の色すごき木々の梢、浅茅原の景色を見るがごとし。染め染めつる色を尽くし果てて、ばうおくの悲しみの声のみなり。余情を忘るる心なるべし。このばうおくと恋慕との声がかりの替はりめ、大事なるべし。

と記す。ここから、禅竹は、先の余情ある状態の濃体の恋慕曲から進んで、紅葉が風に散る風情を麗体の恋慕とし、哀傷に近い曲味に分類したと考えられる。引用の〈松風〉に「松に吹き来る　風も狂じて」（第十一段［ノリ地］）という表現がある。『和漢朗詠集』巻上・落花に載る「落花狼藉風狂後　啼鳥龍鐘雨打

時」がこの表現の原点になると思われるが、禅竹は〈松風〉から、この表現に思い至ったと言うべきであろう。

3．世阿弥は、

音曲習道の次第とは、音声の下地は仕声なり。声をよく使いて、曲をなすに従て、たとい不足なる声なりとも、使い足りて、何とも心のままなる声位にならずば、麗しき音曲の上果にはなるまじきなり。（『五音曲条々』）

などと、「完全円満な」（思想大系頭注）の意味で使用している。禅竹は、

そのかみ、天の岩戸にして、八百万の神達、神楽を奏し給ひしに、忝くも天照大神、詔して、多き中に天児屋根之宣ふより、心妙にして、言麗しきはなしとて、手力雄の尊に岩戸を開かせ出でましし より、一陰・一陽・一音、万物のはじめたり。（『歌舞髄脳記』）

しかれば、静かに麗しき性位は、わざと荒れて、乱れたる風情、歌舞両風におきて、感応ことにあるものなり。中々静かなる時よりはなほ耳目を驚かすとは、この位を言へり。（『至道要抄』）

などの表現から、「麗し」を究極の理想と考え、それを静かな中に荒々しさを含む状態と捉えていたことがわかる。

4．『古今和歌集』巻第九羈旅歌（四〇九番）。左注に「この歌は、ある人のいはく、柿本人麿が歌なり」

5．〈松風〉第八段［上ゲ歌］［クセ］。内容の詳細は、新潮日本古典集成『謡曲集　下』参照。

6．『三体和歌』に、「恋・旅　この二つは、ことに艶によむべし」とあり。

※『五音三曲集』の恋慕は、濃体と麗体の二分類が記される。祝言、幽玄がそれぞれ五分類であるのに対し、恋慕、哀傷、闌曲はそれぞれ二分類となる。これが禅竹の本来の意図であったかどうかは、禅竹自身が「廿六声曲」と述べていることから疑問とせざるを得ない。

※恋慕を濃体と麗体に分類した意図はいまだ不明と言わざるを得ない。ただ、濃体の分類で、禅竹は「幽玄の方は疎き方あるに似たり」と述べており、麗体の方を幽玄として高く評価していると考えられる。「こまやかなる」濃体は艶があり、「うるはしき」麗体は狂があるとするのが、禅竹の考えであろう。

五、哀傷

五音三曲第四、哀傷、[1]魂白体曲味。

これは、ただ[2]縁生の[3]色心を離れたる亡魂の、夢幻に見るがやうにあるべき姿か。古歌に云はく、

[4]浅茅生や袖に朽ちにし秋の霜忘れぬ夢を吹く［訪ふ］嵐かな

[5]［さし声］それ三界易きことなし　なほし火宅のごとしと　仏も説き給へり　ましてや我ら衆生として　ことに 迷ひの海深き

雲水の世の哀れさに　いつか浮かまん無明の波の　寄る辺いづくと定めまし

（クセ）一生は風の前の雲　夢の間に散じ易く　三界は水の上の泡　光の前に消えんとす　綺蘭殿の上には　有為の悲しみを告げ翡翠の帳の内には　無漏の願力ありとかや　栄華はこれ春の花　昨日は盛んなれども　今日は衰ふ願力の　秋の光朝に増じ　夕べに減ずとか　春去り秋来たつて　花散じ葉落つ　時移り所変じて　楽しみすでに去つて　悲しみ早く来たれり

［上］朝顔の花の上なる露よりも　はかなき物は蜻蛉の　あるかなきかの心地して　世を秋風のうち靡き　群れ居る鶴の音を鳴きて　死出の田長の一声も　たが冥路をか知らすらん　哀れなりける人界を　いつかは離れ果つべき

[6]この曲、まことに骨髄に通れる[7]感声のかかり、よくよく[8]念籠（拈弄）して曲味を知るべし。

1. 「魄白体」未詳。『三五記』にない。『金春古伝書集成』頭注は「あるいは遠白体か」とするが、遠白体は、幽玄第四で使用済み。『五音三曲集』になく『六輪一露秘注』で使用される「面白体」の可能性も考えられるが、『三五記』からの例歌や言葉の引用がない。独自に発案した名称と考えるのが妥当だが、ここ以外の使用例はない。

2. 「縁生」は仏教語。縁起とほぼ同義。世阿弥は、『遊楽習道風見』で

有無二道にとらば、有は見、無は器なり。有を現す物は無なり。たとへば、水晶は、清浄体にて、色また無縁の空体なれども、火生・水生をなせり。火・水の別性を無色の空体より生ずること、これいづれの縁正ぞや。ある歌に、「桜木は砕きて見れば花もなし花こそ春の空に咲きけれ」と云へり。遊楽万曲の花種をなすは、一身感力の心根なり。ただ、水晶の空体より火・水をなし、桜木の無色正より花実を生ふるごとく、意中の景より曲色の見風をなさん堪能の達人、これ、器物なるべし。

と言う。内容から「縁正」は「縁生」の当て字と断定できる。なお、禅竹の用例はこの一例のみ。

3. 「色心」は仏教語。物質と精神の意。世阿弥は、『六義』で三義の比曲について

閑花風（九位第三）これなり。比とは、古今注に云はく、「物を二つ並べて、いづれも同じ様なり」と云云。閑花とは、「閑」は柔和なる感心、「花」は秀でたる色心なり。「閑」「花」、いづれも妙果の甲乙なし。しかれば、閑花風をもて、比曲とや申すべき。

と説明する。これによると、「色心」は物質に近い意味か。一方、禅竹はこの語を多用する。「色心万法」とか「色心二法」などの用例が多く、表現のすべてが物質（色）と精神（心）で説明されるという意味であると思われる。

姿、地・水・火・風・空の五大を備ふれば、心また五大を備ふ。

その心の五大をもて姿を埋めば、色体欠くる所なく、一心になりて、色心不二にして幽なり。しかれば、心より、まづ姿なるべし。心に理あり、姿に心あり。（『六輪一露秘注（文正本）』）

とあるように、色と心が一体となる境地が幽玄ということである。

4．『新古今和歌集』巻第十六雑歌上（一五六四番）。詞書「寄風懐旧といふことを　左衛門督通光」。第五句、『新古今和歌集』『心敬私語』では「ふく嵐かな」、『自讃歌』『東野州聞書』では「とふ嵐かな」。

5．〈哀傷〉の曲舞（クセマイ）。［クセ］は〈鍾馗〉にも用いられているが、［サシ］を含む〈哀傷〉の曲舞を用いた完曲は未見。

6．魂白体曲味のみ、歌書への言及がない。魂白体の用語や引用和歌が『三五記』に載らないことも含めて、禅竹が独自の主張を込めた箇所として注目すべきだろう。

7．「感声」は、世阿弥に

見より出で来る能と申すは、指し寄りからやがて座敷も色めきて、舞歌曲風面白くて、見物の上下、感声を出だして、はへばへしく見えたる当座、これ、見より出で来たる能なり。

（『花鏡』批判の事）

とあり、感動して自然に出る声という意味と思われる。しかし、ここと後掲の禅竹の使用例からは、観客に感声を出させる程、感動を与える音声という意味が妥当かと思われる。

第一、祝言音は、をのれをのれと備はれる声の、そのままなる位なり。たとへば、管絃糸竹におきても、吹き出す竹の生得の声、調べ出す糸の声あり。その調子より、次第に曲風に移り行きて、色々様々の感声あるべし。（『至道要抄』）

8．「念籠（拈弄）」は世阿弥に八例あるが、禅竹はこの一例のみ。もとは禅語「拈弄」で、ものをひねくりまわすように、あれこれと考えること。

哀傷第二、[1]物哀体曲味。

諸行無常の世の理を思ひ詠ずるさまなり。大方の哀れ、身の有様、思ひ続くる曲声なり。古歌に云はく、

[2]小篠原風待つ露の消えやらでこの一節を思ひ置くかな

骨味

[3]［曲節舞］伝へ聞く漢王は　李夫人の別れゆへ　甘泉殿の床の上に　古き衾の怨みを添へ　九華帳の内にては　この香の煙を立て　月の夜更け行く風の声　艶容便々と気色立つ　玉殿に移ろひて　李夫人の御かたち　ほのかに見え給へり

［上］三五夜中の新月の　夜半の空くまなくて　長安雲上の粧ひ　気色にいたる心地して　みな感涙を潤せば　君も龍顔に　御袖を押し当てて　反魂の煙の内に　立ち寄らせ給へば　また李夫人は消え消えと　時雨も混じる有明の　見えつ隠れつ蜻蛉の　あるかなきかの御姿　かくやと思ひ知られたり

[4]［小歌］［上］残りても甲斐あるべきは空しくて　甲斐あるべ

きは空しくて　あるは甲斐なき帚木の　見えつ隠れつ面影の　定めなき世の習ひ　人間憂いの花盛り　無常の嵐音添ひ　生死長夜の月の影　不定の雲蔽えり　げに目の前の憂き世かな　げに目の前の浮き世かな

[5]ある和歌の秘書に、「この体ぞ歌の本懐にてあるべき。ただ、最初より心を深く詠まんとすべき事」とぞ云へる。

1. 「物哀体」は『三五記』第三有心体に付属。
2. 『新古今和歌集』巻第十八雑歌下（一八二二番）。詞書「病ひ限りに覚え侍りける時、定家朝臣中将転任のこと申すとて、民部卿範光もとにつかはしける　皇太后宮大夫俊成」。
3. 〈不逢森（反魂香）〉第九段［クセ］。内容は、漢の武帝が、寵愛した李夫人の死後に、道士に命じて反魂香という蘇りの霊薬を求め、それを焚いて李夫人の魂を呼び返すことに成功したが、姿は見えるものの、話しもできず触れることもできないで、煙が尽きると消えてしまったという、白楽天（居易）の詩「李夫人」に詠まれた話に基づく。同様の内容の謡い物「李夫人の曲舞」が世阿弥時代に存在し、〈花筐〉の［クセ］に取り入れられているが、この内容はそれ以後の作か。一曲全体のあらすじは以下の通り。

　都に行って戻ってこない鎌倉商人の娘が、父を尋ねて旅に出、尾張国まで来たところ、病のため、宿でむなしくなり、近くの僧によって葬られる。隣の宿に泊まっていた鎌倉商人が、鎌倉からの旅人が死んだと聞き、様子を尋ねてみると、それは我が娘のことであった。墓に案内されて嘆き悲しむ鎌倉商人に、僧は反魂香を焚けば生前の姿を見ることができると勧める。鎌倉商人が反魂香を焚くと、煙の中に娘の姿が見えるが、話すこともなく触れることもできないまま、やがて煙とともに消えてしまう。

4. 〈隅田川〉第八段［上ゲ歌］。内容の詳細は、新潮日本古典集成『謡曲集　中』参照。
5. 『三五記』有心体に、「この体ぞまことに歌の本懐にて侍るべき。ただ、最初より心を深く詠まむとすべき事とぞ先哲も申したんめる」とあり。